



立花大敬さん「しあわせ通信」  
のお話を紹介していきます(^^)

# 立花大敬さんの言の葉

## ひとつづいのち

五祖法演禪師が弟子たちに問題（公案）を出されました。  
「倩女離魂、いったいどちらの倩女が本物なのか」

今度は、この公案を勉強しましょう。

唐の時代の小説で『離魂記』というのがあるそうで、この公案は、その話をふまえたものです。

張鎰というお金持ちがいました。その人に倩女という美しい娘がいました。また、彼の甥で、王宙という青年がいました。二人は子供の頃から仲良しで、張鎰はある時冗談に、「お前達二人並べると雛人のようだなあ。将来、夫婦になるといいなあ」といったそうです。倩女も王宙も、その言葉を真に受けて、すっかりそのつもりで大きくくなりました。

倩女が年頃になりますと、あちらこちらから、たくさんの縁談があり、ある有力な役人から熱心に申し込まれて、父はついに承諾してしまいました。

ところが、王宙は、その話にショックを受けて、もうこの土地にはいたくないと、はるか遠くの蜀へ行く決心をして舟を出しました。すると、堤防を走って追いかけてくる人がいます。よく見ると倩女でした。

「私はあなたをお慕いしております。どうぞ一緒にいらして下さい」  
王宙はとても喜んで、一緒に舟に乗って、蜀へ向かいました。そして、そこで楽しくくらすうちに、二人の子供をもうけました。ところが、倩女の表情が冴えません。何だかさびしそうです。

王宙がたずねますと、  
「一度家に帰って、お父さん、お母さんにおわびをしたいのです」といいます。

王宙も、もっともな話だと思って、子供を連れて、一家四人で舟に乗って故郷へ帰ってきました。

倩女と子供を舟に残して、まず王宙が倩女の父をたずねました。「長い間、御無沙汰いたしました。おかげで二人とも健康で、子供も二人できたことですから、どうか私たちのことをお許し下さい」すると、父は、

「何をとぼけたことをいつているのかね。倩女は君が国を出てから、すっかり生気をなくして、原因不明の病気になるってしまった、あれからずっと、うつら、うつら寝たままだ」

王宙は驚いて、舟にとってかえし、倩女と子供たちを連れて父の家へ行きます。

そうしますと、病床の倩女がむっくり起き上がり、二人の倩女が顔をあわせると、ニッコリ笑って、ピタリひとつに合体してしまっただけのことです。

五祖禪師は、この『離魂記』の物語を題材にして公案をつくられたわけです。

「いったい、どちらの倩女が本物か」

ある人が答えます。寝たきりでも、植物人間でも、確かに父の家に体があつて、呼吸もしているし、心臓も動いているんだから、父の家の倩女が本物だ。

また、ある人はこういいます。心がすべてをつくるんだからね。倩女の心は王宙のもとにとんでいったんだよ。そうして、その心がつくって王宙と生活したんだから、心のあるところが倩女の居所だ。だから王宙とともにいた倩女のほうが本物だよ。

さて、あなたはどちらの解答が正しいと思われますか。

実は、いずれの解答もまちがいです。五祖禪師の出題意図はそんなところにはないのです。

いのちはひとつしかない、そのことを分からせようとして、この公案を作られたのです。

病床の倩女もひとついのち、子育ての倩女もひとついのちです。

私は今、この文章を書いています。あなたは文章を読んでいらっしやいます。そんな私も、あなたも、時と場所を越えてひとついのちです。

本物はこのひとついのちだけなのです。

無門禪師が、この公案に寸評して、次のようにおっしゃっています。「この本物を悟ったならば、殻を出て、殻に入ること、まるで旅舎に次々宿ってゆくようなものだということが分かるだろう。」

へ殻とは、その時、その時のいのちがまとう衣裳です。

地位や身分も衣裳ですし、また、幸せや不幸などの心の状態も衣裳です。衣裳にすぎないのです。本物は、その衣裳の中にあるもの、ひとついのちです。衣裳は次々着替えてゆきますが、中身が変わることはありません。

人生の道ゆきは、あたかも、次々別のホテルに泊まりながら旅行するようなものです。ある時は、超高級ホテルに宿泊し、またある時は木賃宿（そまつな安宿）に滞在し、時によればお化けが出そうな荒れ寺を借りることになる場合もあるでしょう。

地獄ホテルもあれば、天国ホテルもあります。

地獄ホテルといっても、家ではないのですから、しばらくの我慢で、このホテルを出発できます。天国ホテルで、いつまでも滞在したいといっても、それは許されず、また出かねばなりません。

どんなホテルに滞在している時も、中身であるあなた（ひとついのち）は不変なのです。そこが究極の落ち着き場所なのです。

最後に無門禪師の詩もみておくことにしましょう。

雲月是れ同じ、

深山各異なり。

万福。万福。

是れ一か、是れ二か。

へ雲月はれ同じ、先ほどの寸評では、無門禪師は時間の上の、ひとついのちの移り変わりを説かれましたが、この詩では、空間の方面から述べておられます。

雲も月も、ひとついのちです。あなたが、このひとついのちに目覚められますと、あなたが雲となって空に浮き、月となって輝いているんだということが分かります。これが、天命を知る、ということです。

へ深山各異なり、いのちはひとつですが、その現われ方は別々です。深は深のいのちを發揮し、山は山の姿を發揮しています。これが、各自、天命を完うしている、姿です。

へ万福、万福、これは、すべてのものがそれぞれの天命を完うしている時、出現してくる世界です。万のものが祝福され、最高の喜びと安らぎと調和のもとで生きています。

以上で、天命を述べ、天命の働き出しを述べ、最後に、それによって現成してくる理想世界が述べられました。

へ是れ一か、是れ二か、さて公案にもどって、しっかりひとついのちと、その働き出しについて考えてもらおうとしゃやっています。

#### 立花大敬（たちばな だいけい）さんの紹介

昭和23年大阪生まれ。  
大阪大学にて生物工学を研究。  
19歳（大学在学中）、禪に入門。  
以来、曹洞、臨済宗の諸老師に指導を受けてきた。  
42歳、伊勢神宮にて天命を知る。  
この時期と前後して、数年間に4冊の本を一気に出版する。

45歳で、進学校の高校教師となる。  
48歳、再び「筆の御用」を開始し、「しあわせ通信」を毎月発行。  
著書に「天界の禪者大いに語る」「悟」「禪」「禪の達人たち」  
「しあわせ通信第1集～第10集」などがあります。

今回は「しあわせ通信第3集」に掲載されていた、「ひとついのち」を紹介させて頂きました（^^